

横浜名物を作った鹿沼人

栃木県鹿沼市睦町、鹿沼市立図書館に「お話室」がある。その部屋の棚に十枚綴りの『茂吉のシューマイ人生』という紙芝居がある。話は夕食時の母子のやり取りから始まる。

子「ぼく、今日はシューマイが食べたいや！」
 母「あら、いいわね。じゃあ、夕飯は崎陽軒のシューマイにしましょうか」
 子「キョウケンて何？」
 母「日本で初めて駅弁のシューマイを売り出したところなのよ」
 母「そのシューマイを生み出したのが、野並茂吉さんという人で、この鹿沼市の出身だって知らなかったでしょう！」
 子「うっそー？すごいや！で、どんな人なの？」

野並茂吉(1888-1965)は、栃木県上都賀郡加蘇村加園(現鹿沼市加園)に、父渡辺富三、母ミツの次男として生まれた。渡辺家は由緒ある系図を持つ家柄であったが、父の代に家産が傾き、「高等二年を修了すると、茂吉は学校を中退」(『シューマイ人生』)、働きに出た。

最初の奉公先は、宇都宮の和菓子店。続いて茂木の煙草製造業者。その業者が東京に煙草の卸問屋を出すと、茂吉はそこで煙草の売り子となった。

茂吉の陰日向のない精勤ぶりは、得意先で評判となる。そんな折、養子に迎えたいという店が現れ、その店に務めた。

しかし、故あってその店を辞め、新天地を横浜に求めた。少年時代に見た横浜港の絵ハガキがきっかけだった。茂吉は横浜市内の新聞社で働き出した。主な仕事は新聞配達。

その後、「横浜少年新聞」を発刊。しかし、事業が回らず、半年でとん挫。文無しとなり、職を転々とした。

やがて、市内の東海道本線平沼駅(廃止)近くの食堂経営者に奉公。さらに神戸の同業者に仕え、大阪で弁当屋を営む「水了軒」に務めた。ここで茂吉は結婚を勧められる。横浜の久保コトの婿養子の話だった。

野並家の一人娘・コトが久保家へ嫁いだため、実家は廃家となっていた。茂吉はコトの養女・

野並茂吉

Nonami Mokichi

小川千代と結婚し、野並家の再興を図ることになった。茂吉26歳の時である。

崎陽軒は明治41年(1908)、初代横浜駅(現桜木町駅)に食品の販売目的で開かれた。「その利益をもって久保家の生活費にあてること」(同書)にあった。屋号「崎陽軒」、名義人は久保コト。匿名組合としてスタートした。

後に合名会社となり、茂吉は「代表中心社員」となった。昭和2年(1927)頃から、茂吉はある研究に没頭し出した。紙芝居に戻ると、7枚目にこう書かれている。

茂吉「小田原にはカマボコがある。浜名湖といえはウナギ。京都といえは八つ橋。横浜にも何か名物があったらなあ」。そんなことを考えながら中華街を歩いていると、おいしそうなお鼻をつんつん…。茂吉「あっ！これだこれ！これこそ横浜名物にふさわしい！」

それがシューマイだった。しかし、冷めるとまずくなる。そこを改善し「ついに豚肉と、ある海産物の練り合わせから、冷めてもうまいシュー

マイの調合が発見された」(同書)。茂吉は、郷土なまりから、シューマイを「シューマイ」と発音していた。昭和3年(1928)3月、こうして今に伝わる横浜名物が誕生した。(文中敬称略)

主な参考文献
 『茂吉のシューマイ人生』(原文：斎藤文子・斎藤浩美。絵：清水まり子。平成20年発行)。『シューマイ人生』(野並茂吉著、昭和39年発行)など。



野並茂吉の写真パネル＝鹿沼市睦町、鹿沼市文化活動交流館「郷土のひとびと」コーナー(筆者撮影)

偉人から読み解く「七転び八起き」のヒント

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
 ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一